

【研究論文】

「静かな革命」期における世俗的ナショナリズムの
宗教性とカトリックの反応

Le religieux du nationalisme séculier et la réaction
du catholicisme sous la Révolution tranquille

伊達聖伸
DATE Kiyonobu

Résumé

La Révolution tranquille des années 1960 est souvent présentée comme un passage de la « Grande noirceur » catholique à la modernité laïque, sinon celui du catholicisme à la laïcité. En nous appuyant sur les études récentes, nous montrerons bien plutôt que la sortie québécoise de la religion a été en réalité à la fois religieuse et laïque. Afin d'étayer cette thèse, cet article s'attardera d'abord sur les catholiques de gauche, tout imprégnés alors du personnalisme d'Emmanuel Mounier, en particulier Fernand Dumont. Ce dernier a en effet construit une forme de nationalisme catholique moderne qui pouvait aller de pair avec un nationalisme séculier. S'il partageait avec Pierre Elliott Trudeau l'idée d'un catholicisme anticlérical, il s'en désolidarisait du fait qu'il mettait en avant la souveraineté de la nation canadienne française. Par ailleurs, il se distinguait d'une part de Claude Ryan, pour qui le libéralisme religieux se conjugait avec le libéralisme économique, et d'autre part de Pierre Vallières, selon lequel la Révolution tranquille devait évoluer vers une révolution socialiste. L'idée dumontienne d'une démocratie sociale d'inspiration catholique pouvait dès lors tout naturellement s'accommoder du nationalisme péquiste de René Lévesque qui, lui, était agnostique. Notre article étudiera enfin la réaction du monde catholique durant cette période à partir d'une relecture du rapport de la commission Dumont.

キーワード：「静かな革命」、人格主義、フェルナン・デュモン、ナショナリズム、宗教性

Mots-clés : Révolution tranquille, personnalisme, Fernand Dumont, nationalisme, le religieux

はじめに——宗教から世俗へという図式を見直す

1960年代の「静かな革命」は、一般に「宗教」から「世俗」への一大転換期と見なされている。——人びとの生活を大きく規定してきた宗教の影響力が後退し、教育・医療・福祉の主導権はカトリック教会から「世俗国家」に移行した¹。自由主義的な政治改革と経済発展によって人びとは自信をつけ、世俗的ナショナリズムに基づく独立運動が高揚し、フランス語を保全するための梃入れが進んだ——。

このような語り方は、人びとのナラティヴにおいても、歴史叙述においてもよく見られ、一定の妥当性を持つ。だが、このような語り方自体が、「静かな革命」がもたらした世俗の地平でなされている点に注意したい。「宗教」から「世俗」へという図式そのものが、「静かな革命」の成果を前提とし、それに大きく枠づけられているのである。

ミカエル・ゴヴロ (Michael Gauvreau) は、これまでケベック現代史の歴史叙述は2つの潮流に支配されてきたと指摘する (Gauvreau, 2008)。第1に、「正統派 (オーソドックス) リベラル」である。その解釈によれば、「静かな革命」はカトリック色濃厚なモーリス・デュプレシ (Maurice Duplessis) の「暗黒時代」からの解放で、科学技術に裏打ちされた経済成長と世俗的な政治の近代化を目指す中流階級が時代遅れのカトリックを拒否するようになった²。これは1960年代の「静かな革命」のさなかに生まれた語り方であり、またそれを引き継ぐものである³。

第2に、「修正派 (レヴィジヨニスト)」の潮流である。これは1970年以降に登場してきた歴史叙述で、ケベック社会は近代的で自由な資本主義社会であるという当時の自己認識をフレームとし、そのルーツを過去に探し求める歴史叙述である。修正派は、ケベック社会を支配してきたのは、カトリック教会と政治的保守主義の結びつきよりも英系北アメリカ社会の自由資本主義であるとの見方を打ち出した⁴。

2つの歴史叙述とも、宗教は近代の進展につれて衰退するという古典的世俗化論を前提とし、1960年以前のケベックではカトリックが支配的な権力を

握っていたと見る点では一致している。それは大筋では誤りではないが、宗教は社会の影響を受ける客体、あるいは周遍的なものと見なされている。これに対してゴブロは、カトリックは近代化の影響を一方的に被った客体ではなく、近代化を導く主体としての役割も演じたと主張している (Gauvreau, 2008)。É = マルタン・ムニエ (É.-Martin Meunier) とジャン＝フィリップ・ヴァラン (Jean-Philippe Warren) も、人格主義的なカトリックが「静かな革命」を主導したとの命題を立て、ケベックにおける「宗教からの脱出」は宗教的だったと論じている (Meunier et Warren, 2002)。

本稿は、上記の研究動向や指摘を踏まえ、「静かな革命」にはカトリック左派の人格主義が重要な役割を果たしたことを論証し、「静かな革命」では宗教から世俗への単純な移行が起こったのではなく、宗教と世俗の関係が再編されたと論じる。

その際、世俗的ナショナリズムの「誕生」とその宗教性に注目する。近代の政治は神学の転移と評したのはカール・シュミット (Carl Schmitt) だが (シュミット, 1971)、彼の議論は精神的権力と世俗的権力の二元性の歴史を持つ西欧の19世紀的な国民国家を前提にしている。これに対してケベックでは、カトリック教会が長く大きな社会的影響力を保ち、国家機構そのものが「静かな革命」期に形成された。そうした文脈におけるナショナリズムの世俗性と宗教性の特徴は別途読み解く必要があるだろう。もっとも、世俗的ナショナリズムの宗教性と言っても曖昧模糊としており、議論が拡散するおそれがある。そこで本稿では「静かな革命」の担い手として知られる知識人フェルナン・デュモン (Fernand Dumont) に注目して、世俗的ナショナリズムの宗教性の輪郭を明らかにする。さらに、教会を中心とするカトリック勢力が「静かな革命」にどう向き合い、カトリックの内実がどのように変化したのかを論じる。

1. 人格主義の系譜と「静かな革命」

1.1. エマニュエル・ムニエの人格主義とケベック

人格主義とは、20世紀に登場したカトリック内部の刷新運動で、おもにフランスにルーツを持つ。従来カトリックは、人間を罪深い存在と見なし、精神に関わることは聖職者が排他的な権限を持つとし、教会という制度と儀礼を重視してきた。これに対し、人格主義は個人の人格と平信徒 (laïcs) の活動を重視した。思想的には世俗的近代の弊害を批判し、実践的には時代の課

題に向き合い、宗教的なユートピアをこの世に実現することを目指した。

人格主義は、互いに重なる3つの要素からなる。第1に、現実の社会に対して開かれた「新神学」である。イエズス会のアンリ・ド・リュバック (Henri de Lubac)、ドミニコ会のマリ＝ジョゼフ・ラグランジュ (Marie Joseph Lagrange) らの名が知られている。第2に、社会問題に取り組む「アクション・カトリック」である。マルクス主義や共産主義に対抗しながら、労働者や人民への司牧活動を通じて社会改革を目指した。第3が、狭義の「人格主義の哲学」である。エマニュエル・ムーニエ (Emmanuel Mounier) が中心人物だが、シャルル・ペギー (Charles Péguy)、ジャック・マリタン (Jacques Maritain) らもカバーする。これらがケベックに輸入され、「静かな革命」を準備する (Meunier et Warren, 2002, p. 42, pp.52-54)。

アクション・カトリックとムーニエの人格主義について議論を掘り下げておこう。ヨーロッパのアクション・カトリックはマルクス主義やファシズムと対峙しながら保守的傾向を強めていくが、ケベックのアクション・カトリックはリベラルな特徴を有していた (Gauvreau, 2008)。1930年代、若いフランス系カナダ人は、アクション・カトリックの活動を通して先行世代の体制順応主義とは異なる傾向を示しはじめた。世界恐慌のさなか、彼らは産業化が進む都市における宗教的紐帯の再建を目指し、同世代の労働者たちに教えを説いた。これはカトリック教会の社会教説に合致する活動で、ケベックの教会当局によっても公認されていた。ただ、教会当局は保守的な態度を維持していたのに対し、若い世代は女性たちも巻き込みながら、平等主義的で民主的な志向を強めていく。運動の担い手たちは、教会の位階制に批判的な態度を示す一方で、教会を社会に向かって開いていこうとする。

ムーニエの人格主義の意義を理解するには、この哲学がカトリックの刷新運動であると同時に、資本主義と社会主義と全体主義に対する批判的応答でもある点を押さえるのがよい。ムーニエは、カトリック教会の慣習化した儀礼中心主義に抗して、各人が自分の内部にキリスト教の伝統を見出し、隣人に対して開かれた寛大な態度を取ることを説いた。カトリック信仰に基づきながら、教会の外にもキリストの恩寵が存在するとし、異なる信仰の持ち主や無神論者とさえも連携した。彼が1932年にパリで創刊した雑誌『エスプリ』 (*Esprit*) は、現代世界の悪の根は政治や経済以上に人間にあるとし、狭義のカトリックを超えたキリスト教信仰に基づき文明の立て直しをはかろうとしたもので、フランス・カトリック左派の流れを代表する。

人格主義は、合理化された近代の資本主義と個人主義を批判するとともに、哲学的・科学的・社会的決定論に基づく唯物論的なマルクス主義をも退け、^{スピリチュアル}靈的で社会的な存在としての人間を確認する。「人格」は、自由主義的な社会において経済力を競い合う「個人」とは区別され、文化的で^{スピリチュアル}靈的な「共同体」に人間を結合させる契機を持つとされた。かといって、このように共同体の意義を評価する人格主義は、少なくともその理念においては、共同体そのものを自己目的化するものではなかった。全体主義国家のファシズムに対しては、人格主義はむしろ「個人」を擁護する防波堤の役割を担っていた。

人格主義が共同体を重視するか、個人を重視するかは、文脈に応じて揺れ動く。ゴプロによれば、ケベックでは共同体主義的で組合的な傾向が強かった1930年代のアクション・カトリックを基盤として、個人主義的でエリート主義的な傾向を持つ1950年代の人格主義が築かれ、「静かな革命」を準備した (Gauvreau, 2008, pp.29-30)。ムーニエの人格主義は、脱カトリック化の進む20世紀後半のフランスではほとんど政治的な効力を発揮しえなかったが、ケベックに輸入されることで社会的・政治的勢力になりえた。ムーニエの影響を受けた平信徒たちは、宗教的精神に基づく近代社会を作り出そうとし、「静かな革命」の重要な一翼を担っていく。

1.2. 『シテ・リーブル』とその周辺

ムーニエの没年1950年にケベックで創刊された『シテ・リーブル』 (*Cité libre*) は、『エスプリ』のケベック版としての性格を有していた。この雑誌の刊行は、中産階級や知識階級に訴えかける言論活動と言える。これは1930年代のアクション・カトリックが、労働者階級に大きな影響力を発揮しながら、中流階級を巻き込む力が弱かったことに関係している。『シテ・リーブル』同人たちは、将来を切り拓くのは若者であるというアクション・カトリックから受け継いだ展望を、1950年代に誌面を通じて提示した。

『シテ・リーブル』に集まった若いカトリック知識人たちのなかには、ピエール・エリオット・トルドー (Pierre Elliott Trudeau)、フェルナン・デュモン、ピエール・ヴァリエール (Pierre Vallières) らがいた。旧弊的な教会組織とデュプレシの保守政権を批判し、「静かな革命」の引き金になったとも言われるこの雑誌には、後年ケベック党 (PQ) を設立するルネ・レヴェック (René Levesque) も論文を寄せている。1960年代にはチャールズ・テイラー (Charles Taylor) の寄稿も見られる。

『シテ・リーブル』は、反教権主義的ではあったが、反カトリック的でも反キリスト教的でも反宗教的でもなかった。雑誌の同人たちは既存の権威主義的な政治と教会を批判したのであって、その批判精神を支えていたのは、合理主義でも唯物論でも無神論でもなく、刷新されたカトリック信仰にほかならなかった。権威主義からの解放をもたらすカトリック信仰と近代的な世俗的価値観は、敵対的競合関係には入らなかった。

一方、社会の伝統的価値を問い直す態度がキリスト教批判にまで行き着いた例としては、1948年創刊の『ルフュ・グローバル』(*Refus global*)がある。シュールレアリズムの影響を受けた芸術家たちを集めたこの雑誌は、「静かな革命」の出発点のひとつとされる。

1963年から1968年まで刊行された『パルティ・プリ』(*Parti pris*)も、「静かな革命」期を象徴する雑誌である。『シテ・リーブル』の背後にはムーニエの人格主義があるが、『パルティ・プリ』はサルトルの実存主義をモデルとした。2つの雑誌を行き来する寄稿者もいたが、『シテ・リーブル』が人びとに信仰の刷新を呼びかけたのに対し、マルクス主義的な『パルティ・プリ』は教会のみならず宗教自体をケベック史における忌まわしい過去と見なした。2つの雑誌は、ナショナリズムについても見解を異にした。教権主義的ナショナリズムからの解放を目指す『シテ・リーブル』は反ナショナリズム的な普遍主義志向だったが、人民の解放を目指す『パルティ・プリ』はケベック独立志向だった(Angers et Fabre, 2004, pp.117-121)。

『シテ・リーブル』の「反ナショナリズム」に不満を抱いたのは、『パルティ・プリ』に集まった宗教批判を身上とする社会主義的左派ばかりではなかった。「静かな革命」の進行につれ、新しいナショナリズムに対する賛否をめぐり『シテ・リーブル』同人のあいだで食い違いが出てきた。トルドーやペルティエは新しいナショナリズムの台頭に批判的で、デュモン、ギー・ロシェ(Guy Rocher)、ジャック・グランメゾン(Jacques Grand'Maison)らは1962年創刊の『マントゥナン』(*Maintenant*)のもとに結集した。

『マントゥナン』はドミニコ会の雑誌で、当時のドミニコ会には新しいケベックを希求する進歩的な神学者たちがいた。同誌の編集長は、聖職者と平信徒を平等と考えた。この雑誌は、修道会が内容を検閲することなく出資した初の雑誌とされている。同誌は1967年よりケベックの主権獲得に向けて論陣を張り、1970年代には左派ナショナリスト政党であるPQの主権獲得運動を支持する(Roy, 2013)。

以上、人格主義的なカトリック左派にとっては、宗教的刷新運動が「静かな革命」を導くものであったことを示してきた。それが世俗的な政治運動と対立するどころか、連動しうることも示唆してきた。そのことの裏付けとして、以下では「静かな革命」期を代表する知識人フェルナン・デュモンを取りあげ、カトリック信仰が世俗的なナショナリズムを支える理路を明らかにしたい。それによって、20世紀後半のケベック・ナショナリズムの宗教性の特徴を示したい。

2. 世俗的なナショナリズムの宗教性——フェルナン・デュモンの軌跡を中心に

2.1. カトリック左派としての知的形成

フェルナン・デュモン (1927-1997) はつましい労働者の家庭に生まれたが、出自の文化とは大きく異なる道を歩んだ。1950年代のラヴァル大学で学んだ彼は、平信徒の立場から、科学的知識は愛に至るべきであるという信仰を形成するとともに、学問研究と社会的実践活動を有機的に連関させようとした。それはアクション・カトリックが、キリスト教の理念と自由・平等・博愛の理念を調和させることで、工場と都市をキリスト教的精神で刷新できると説いていた時期でもあった。このような状況でムーニエの人格主義から強い影響を受けたデュモンは、刷新されたカトリックの精神を、教会を超えて社会に広く行き渡らせることが重要だと考えた。彼のなかでは、キリスト教的ユマニスム、人文社会科学、社会的実践への関心は連動していた。

デュモンは1958年に「フランス系カナダ人の自覚を妨げているものについて」と題された論文を『シテ・リーブル』に寄稿し、2つの立場を批判した。第1に、彼は旧弊的なカトリックの立場を斥ける。既存の制度や慣習に寄りかかり続ける者は、聖職者にも大衆にもいる。そうした人びとに向かってデュモンは、批判的な信仰の必要性を訴える。第2に、彼はブルジョワ階級に階級闘争を挑み、資本主義的な人間観を斥ける。経済的自由主義と親和的な連邦主義者を批判し、労働者と知識人を結びつけるナショナリズムを構想する (Lamonde, 1991)。

当時のケベックでは、ネイションの意識はカトリックに従属しており、カトリシズムが普遍的なものと考えられていた。一方、近代の抽象的な個人主義にも普遍性があると見なされていた。これに対してデュモンは、フランス系カナダ人の新たな自覚をとまなうナショナリズムは国際的な社会民主主義の潮流と合致するもので、旧弊的なカトリシズムや抽象的なリベラリズムよ

りも、より普遍性が高いと考えた。

『シテ・リーブル』の基本的性格がデュブレシ時代のナショナリズムを批判する反ナショナリズムと自由主義にあったとすると、デュモンの論文は思想の自由を擁護しつつナショナリズムの刷新をはかる異色なものであり、ナショナリズムを警戒するトルドーとの違いが出ている。実際、ナショナリズム志向の『マントゥナン』が刊行されると、デュモンの言論活動の軸足はそちらに移る。

デュモンは1964年に『キリスト教思想の転換のために』(*Pour la conversion de la pensée chrétienne*)を出版した。この本で彼は、時代と社会の変化に教会は対応できているかと問うている。人びとが教会から離脱しつつあるのは、教会が本来のキリストのメッセージから逸脱しているからではないのか。タイトルに含まれる語「転換」(conversion)には、「回心」の意味もある。平信徒の立場から教権主義を批判し、教会に方向転換を促す内容である。

デュモンは言う。時代の変化につれて宗教は社会のなかで周辺化されつつある。「宗教が生活の残りの部分と一致しなくなると、スピリチュアリティが生き生きとした伝統から切り離されてしまうとき、祈りは義務に墮落する」(Dumont, 2008, p.53)。そこで意識の方向転換が必要である。社会に背を向けて自分の内側に引きこもるのではなく、「時代の兆候」(signes du temps)を読み取ることが必要である (Dumont, 2008, p.65)。

重要なのは、教会に政治的な役割を担わせることでも、教会を社会から隔絶した制度として保存することでもない。デュモンは、「キリスト教社会」の展望のもとに「教会」を批判している。それは、キリスト教を清算して世俗主義に向かうものではなく、キリスト教の精神を救い出して同時代の社会生活のなかに位置づけ直そうとするものである。

2.2. デュモンのナショナリズムの輪郭

カトリックのスピリチュアリティと社会民主主義を結びつけようとするデュモンが構想した新しいナショナリズムを、同時代の知識人や政治家の議論と比べてみよう。

ピエール・エリオット・トルドーは、ムーニエの人格主義の影響を受けてカトリックの教権主義を批判し、『シテ・リーブル』に参加した。ここまではデュモンと同様である。だが、人格主義をナショナリズムと結びつけてフ

ランス系カナダ人の将来像を思い描いたデュモンに対し、トルドーは人格主義を個人主義の方向に引きつけて、カナダの共通利益を考えた。

トルドーは1952年に『シテ・リーブル』に寄せた論考で、「集合体としてのカトリックが民主主義の支柱となった試しはほとんどないことを認識すべき」と述べている (Lamonde, 1991, p.72)。彼の目には、デュプレシを支持するフランス系カナダ人のカトリック信仰は表面的なもので、そのナショナリズムは反民主的かつ非道徳的で、カナダの共通利益を特殊な利益に従属させていると映った。個人主義とカナダの共通利益を重んじるトルドーにとって、フランス系カナダ人のネイションが占める位置は少ない。

デュモンは『マントゥナン』に言論活動の拠点を移して、ネイションが主権を獲得すべきという議論を展開していくが、トルドーはまさにそのような主張の登場を前にして、ジュリアン・バンダ (Julien Benda) の『知識人の裏切り』(1927年)を念頭に、論文「知識人の新たな裏切り」(1962年)を『シテ・リーブル』に発表した。表題に込められているのは、知識人はネイションではなく正義や理性など普遍的なものに仕えるべきというメッセージである。「国家とネイションの概念を切り離し、カナダを真に多元主義的^{ポリエスニック}で多民族的な社会にしなければならない」(Lamonde, 1991, p.165)と述べるトルドーは、独立志向のナショナリストを厳しく批判する。のちにカナダ連邦首相となるトルドーにとって、ネイションは特殊なものであって、普遍的なものではない。

デュモンが警戒していたのは、教会制度の保守的な部分の温存とプチブルジョワの経済的自由主義が結びついてネイションの統一が妨げられることであった。デュモンは宗教的自由主義を歓迎したが、経済的自由主義の進展には問題があると見ていた。個人主義に基づく多様化が進みすぎても、北米におけるケベックの独自性が失われてしまうと考えていた。

この点においてデュモンは、宗教的には左派だが経済的には右派のクロード・ライアン (Claude Ryan) と袂を分かたず。ライアンは人格主義のカトリックの流れを汲むが、ムーニエの読者ではなく、『シテ・リーブル』にも参加していない。日刊紙『ル・ドゥヴォワール』(Le Devoir)の主筆(1964～1978年)となった彼は、ケベックが独自の社会であることを擁護するナショナリストだが、独立志向ではない。個人の自由と集合体の自由のバランスを模索し、マルクス主義左派を退ける保守派の連邦主義者として、のちにケベック自由党 (PLQ) のリーダーになる。PLQ 党首 (1978～1982年)としては、

主権獲得をめぐる 1980 年の州民投票において、「ノン」のキャンペーンを率いた。

モンレアルの貧しい労働者階級出身のピエール・ヴァリエール (Pierre Vallières) は、人格主義をマルクス主義的に理解した。ブルジョワを嫌悪し、労働者の尊厳を説き、貧困問題の解決を訴えた。ムーニエの読者で『シテ・リーブル』同人だったが異色の存在で、「静かな革命」は「静か」であるうちは革命ではないとし、社会主義革命への深化を主張した。彼は『シテ・リーブル』を離れ、1964 年創刊の雑誌『ケベック革命』 (*Révolution québécoise*) に携わったのち、マルクス主義を謳う『パルティ・プリ』に合流した。フランス系カナダ人労働者が資本家に搾取されてきた様子を『アメリカの白い黒人』 (*Nègres blancs d'Amérique*) で描き出したヴァリエールは、アルジェリアの民族解放戦線を支援したフランツ・ファノン (Frantz Fanon) の植民地主義批判の影響を受けている (Laniel, 2018, p.666)。ヴァリエールはケベックの独立運動を支持したが、それは社会主義革命の展望に立ってのことだった⁵。

これに対し、デュモンはマルクス主義の影響を受けたがマルクス主義者ではなく、暴力革命を支持しなかった。『シテ・リーブル』から『マントゥナン』に言論活動の拠点を移した彼は、『パルティ・プリ』の寄稿者ではない。デュモンの位置に近かったのは『マントゥナン』同人にほかならず、聖職者のジャック・グランメゾンは『預言主義の危機』 (1965 年) を著し、教会はもはや社会全体のために語るわけではないが、社会において批判的機能を担うべきと主張した。このグランメゾンの著作は、前述したデュモンの『キリスト教思想の転換のために』からの影響を受けるとともに、後述するデュモン報告書に影響を与えている。

スピリチュアルなカトリックの連帯の感覚に社会民主主義の表現を与え直す新たな世俗的ナショナリズムによって、北米で支配的な経済的自由主義に対抗するというデュモンおよび『マントゥナン』系のカトリック左派の思想家たちは、1968 年に結成されるルネ・レヴェックのケベック党 (PQ) に希望を見出していく。PQ にとっても、自分たちの政治的プログラムの実現にはカトリックの支持が不可欠だった。レヴェックと『マントゥナン』編集長の神父とのあいだには親交があった。レヴェック自身は不可知論者だったが、カトリック左派に「好意的」だった (Roy, 2013, p.179)。「静かな革命」のケベックにおいては、カトリック的な社会民主主義の理念と、世俗的ナショナリズムによる政治的主権獲得という目標は、矛盾するどころか滑らかにつな

がり、互いに強固に結びついていた。

このような構図を踏まえることによって、ケベックの世俗的ナショナリズムが宗教性を帯びるメカニズムを説明することができる。それは、「制度」としてのカトリックの後釜を務める「代替宗教」としての機能を果たすことによって宗教的であるばかりではなく、教会に対して距離を設けて「精神」に純化したカトリックに支えられている点においても宗教的なのである。

2.3. 世俗的ナショナリズムの宗教性とデュモンの幻滅

『マントゥナン』 同人のジャック・グランメゾンが『ナショナリズムと宗教』（1970年）において、かつてカトリック教会が果たしていた社会統合の役割を、新しいナショナリズムが代替していると述べている。宗教が多くの人びとにとって二義的なものになるなか、ルネ・レヴェックのPQが、主権連合運動を展開する穏健な独立志向の左派として、農村と都市、保守と革新、民主主義と社会主義、カトリックとライシテという幅のある諸要素を束ねている（Grand'Maison, 1970）。

1960年代には宗教改革に注ぎ込まれていたエネルギーが、1970年代になると政治と世俗的ナショナリズムのほうへと流れ込んでいく（Baillargeon, 1994, p.127）。この時期のナショナリズムはキリスト教の千年王国論を世俗化したもので、その社会民主主義的な性格はアメリカの資本主義への対抗意識にも動機づけられていたとの指摘もある。政治的主権の獲得は救済の約束に相当する希望の位置を占め、ドラッグや性革命のカウンタカルチャーも聖なるものの探求に関わっていた（Couture, 1994）⁶。

デュモンは刷新されたカトリックの精神を世俗的なナショナリズムに吹き込もうとしていたが、彼の思惑とは裏腹に、1970年前後の社会の一連の動きはカトリックと世俗的ナショナリズムの両立を困難にしていた。1969年、教皇パウロ6世は、ローマを訪れたトルドー首相にカナダは「ひとつのネイション」と述べた。この発言は、ケベックが英系カナダとは異なるネイションであるとの前提に立つカトリック・ナショナリストを落胆させた。1970年の州議会総選挙では、主権獲得を目指すPQは、連邦政府との協調路線を掲げるPLQに敗れた。同年の「十月危機」——ケベック独立を至上命令とする「ケベック解放戦線」（FLQ）による政府要人拉致事件——は、マルクス主義に依拠する暴力的な独立運動の正当性を大きく失墜させた。こうした状況のなかで、レヴェックとPQは、独立の大義をメシア主義的で宗教的な調子で

主張するのを、1970年代半ば頃までにはやめている (Gauvreau, 2008, p.346)。

1976年に州政権を奪取したPQは、主権連合構想を掲げて1980年に州民投票に打って出たが、反対意見が6割に達し、独立志向の世俗的ナショナリズムは最初の挫折を余儀なくされた。1980年の州民投票は「集合的希望の終焉」を意味しており、人びとは連帯から消費社会の個人主義へと方向づけられていく (Baillargeon, 1994, p.127)。1995年には主権獲得をかけての2回目の州民投票が行われたが、僅差で否決され独立の夢は潰えた。

晩年のデュモンは、2回目の州民投票の年に『共通理性』(*Raison commune*)を著わし、「静かな革命」とその後のケベックの展開を「夢から幻滅へ」と評した (Dumont, 1997, p.21)。時代を先導する位置にいたはずのデュモンは、社会の急速な変化に追い抜かれていく。彼自身は終生カトリック信者としてフランス系カナダ人を中心とするナショナリズムに希望を抱き続けたが、後続世代にはそれは保守的な振る舞いに映った (伊達、2016)。

3. デュモン委員会報告書を中心に——教会当局とカトリック左派が語る「私たち」

ここまで、フェルナン・デュモンの思想の輪郭を明らかにしつつ、ケベックの世俗的ナショナリズムにどのような宗教性が見られるかについて論じてきた。では、教会を中心とするカトリックの側は「静かな革命」にどう対峙したのだろうか。世俗性とカトリックが対立するよりも連動しているのがケベックの特徴だが、ここでもやはりデュモンに注目し、彼が主宰した委員会の報告書を取り上げてカトリック側の動きを検討する。

1968年、フランス系カナダの司教たちによって「平信徒と教会に関する調査委員会」(*Commission d'étude sur les laïcs et l'Église*)が設けられた。委員長になったのはフェルナン・デュモンで、彼の名にちなんでデュモン委員会とも呼ばれる。委員はアクション・カトリックの系譜に連なる平信徒と司教を含む聖職者から構成され(全12名のうち女性は4人)、クロード・ライアンやジャック・グランメゾンも名を連ねた。委員会の目的は、ケベックのカトリックの現状分析および将来構想で、その成果は1971年から翌年にかけて刊行された全5巻の報告書にまとめられた。

委員会設立の背景には、第二ヴァチカン公会議とカトリック世界における近代化への機運があった。位階制に基づいて聖職者が主導する教会から、平信徒が参加し、人びとの声に耳を傾け対話する教会への転換がはかられつつ

あった。宗教的精神を純化して世俗的ナショナリズムを支える展望を示したデュモン自身は、新しい民主主義を妨げている原因は旧弊的なカトリック教会そのものにあると考えていた。彼の目には、社会の変化に対応できない教会が、社会から取り残され、社会の世俗化をむしろ後押ししていると見えた。他方でデュモンは、急速な世俗化は個人を不安定にし、存在論的疎外をもたらしかねないと見ていた。「静かな革命」の進行につれて社会の多様化と価値の相対化が進むと、カトリック保守派の不安は、カトリック左派も共有するものとなった。ある時期までは、制度的な教会を保守する立場と、人格主義の観点から新しい社会の宗教的紐帯を模索する立場の違いが目立っていたが、いまや教会組織の人びともカトリック左派も、人びとの個人主義化の進展を抑制する必要があるという点での認識の一致を見せるようになる。

1960年代後半のナショナリズムや言語政策や学生運動は、社会の分裂を浮かびあがらせつつあった。そうしたなかでデュモン委員会は、集合的自意識の再定義によって社会を一致の方向に向かわせようとした。

この10年、私たちの社会は教会なしで済ませてきたように見える。教育、社会保障、社会運動は独自の動機と目的を見出している。信徒の大部分が古い家を離れている。集合体〔ケベック社会〕が新しいプロジェクトを明確にすることを試みているように、教会もそのようにすることを余儀なくされている。教会がこの仕事に取り組むには、さまざまな戦略を立てなければならず、次第に失いつつある力で対峙するしかない。何よりもまず、過去から私たちに伝えられてきたスピリチュアルな資源 (ressources spirituelles) に訴えなければならぬ (Commission d'étude sur les laïcs et l'Église, 1971, p.74)。

デュモン委員会の調査によれば、宗教的实践は急速に低下している。それは若者において顕著だが、上の世代にも見られる。彼ら彼女らの多くにとって、「教会」は位階制ヒエラルキーを意味している。教会の権威にはもはやしたがうことができないという信者が増えている。他方、精神の渴きを覚え、意味を新たに求める人びとも少なくない。現在のケベックのカトリック信徒は、各人に固有の状況と生き方から出発することを望んでいる。そこで「私たち」には「根本的な再方向づけ」(réorientation radicale)が必要である。カトリック教会はケベックの歴史において決定的な役割を果たしてきたが、世俗化と多元化が進む社会のなかで、これまでの前提は通用しない。だが、教会は依然と

して重みを持つ制度でもある。教会に必要なのは、キリスト教の根本に立ち返って豊かなスピリチュアリティの「遺産」を見出し、現代化を通じて将来の社会の「計画」に参加する主体となることである。「私たちの教会に生命力と集合的運命を与え直すこと、私たちの信仰の経験とキリスト教的アイデンティティに共通の表現を再び見出すこと」(Commission d'étude sur les laïcs et l'Église, 1971, p.84)。これこそが現代の課題であると報告書は言う。

教会は岐路に立たされている。それは世俗化する社会において異質な集団となってしまうのか。それとも、刷新を通してケベックにとって重要な集団として位置づけ直され、「私たち」の新しい「集合的運命」の担い手になることができるのか。報告書は、教会は社会の潮流に背を向けて私的領域に閉じこもるようではいけないと忠告し、「普遍的な救済をもたらした主〔キリスト〕は公共的な人間 (personnage public) であった」(Commission d'étude sur les laïcs et l'Église, 1971, p.48) 点に注意を喚起する。ここには、もはや政治の領域で公的役割を果たすわけにはいかなかった教会に、社会における公的役割を新たに担わせる関心が表われている。近代社会では宗教は私事化されるという通念は根強いが、世俗と宗教を明確な公私の分離に対応させるモデルはケベックには当てはまらないというのが委員会の考えである。カトリックはもはやケベックの政治的ナショナリズムを導くものではないが、それを支える位置に置かれている。

デュモン委員会はケベックのカトリックに向けて語っているが、ケベック社会の住民の圧倒的多数はカトリックであるという前提に立っている。そうして「私たち」の社会の現状と課題について述べており、報告書にはケベックの住人全体に向けて語っているかのように読める箇所も見られる。「一人の人間が自分では制御できない多様性のなかを生きている。一人の市民にして信者であるところの人間がさまざまな所属と連帯によって引き裂かれている。一人のケベック人が大いなる集合的冒険のなかで自問している。一人のキリスト教徒が福音の価値のいくつかに愛着を抱いている。私たちの存在がこのようなものであるかぎり、私たち全員が思考・行動・生活の統一という深い必要性を共有しているのである」(Commission d'étude sur les laïcs et l'Église, 1971, p.52)。ここで言う「私たち」とは誰のことなのだろうか。キリスト教徒は「私たち」に含まれるようだが、非キリスト教徒は含まれるのか。教会から距離を取るようになったカトリックは、報告書が言うところの「私たち」に自分自身の姿を認めることができたのか。

デュモン委員会とは、急速に変化するケベック社会においてカトリックの役割を再定義する野心的な企てだった。従来のカトリックはフランス系カナダ人を結束させる「市民宗教」の役割を果たしていたが、デュモン委員会はカトリック教会を「公共的なデノミネーション」として位置づけ直すものだったと評価できる (Seljak, 2000)。だが、委員会報告書がケベックの教会や社会に与えた影響は限定的との見解もある (Baum, 1991, p.63)。第二ヴァチカン公会議が開催されていた時期にはケベックの教会にも変革の機運が兆していたが、デュモン委員会が報告書を提出する頃には、その勢いに陰りが見られた。司教たちの多くは保守的な姿勢を維持し、報告書の提案には耳を傾けなかった。教会内の伝統主義者と近代主義者が歩み寄るのは難しかった。他方、社会の人びとはと云えば、急速な世俗化が進むなかで教会の果たす役割にますます無関心になっていったのである。

おわりに——文化的参照枠として残るカトリック

社会学者のレイモン・ルミュー (Raymond Lemieux) は、「静かな革命」によってケベックはカトリック教会が人びとの生活全般を規定するような社会ではなくなったが、それでもカトリックは世俗社会における宗教文化として再編されたと論じている。

世俗化の度合いをはかる指標のひとつである日曜日の教会出席率は、1965年には85%だったが、30年後の1990年には35%と激減した (Lemieux, 1990, p.146)。だが、これは伝統的な制度宗教の実践の低下を如実に示すものではあっても、カトリックや宗教の衰退を意味するとはかぎらない。

実際、1960年代から1970年代にかけて、ケベックのカトリックには新しい動きが見られるようになったとルミューは言う。第1に、宗教教育のあり方が公教要理 (catéchisme) から信仰教育 (catéchèse) に変化した。前者による教育では、教会当局によって正統なものと権威づけられた知識を繰り返し、子どもたちにそのまま覚え込ませることに主眼が置かれていたが、後者は子どもたちが日常的な生活の経験を通してキリスト教の教えを発見していくことを目指した。

第2に、従来の教区とは異なる「共同体」が創設された。都市の中産知識階級に属する人びとが中心となって、新しい宗教的・社会的な結束を作り出そうとしたのである。そうした人びとは、制度化されたカトリックにしばしば不満を抱いており、教会当局に対して意識的な距離を保つこともあったが、

互いに友好的な関係を結ぶこともあった。

第3に、カリスマ刷新運動である。プロテスタントのペンテコステ派から刺激を受けて、ケベックのカトリックにおいても、聖霊に満たされ異言を発する人びとが感情的なつながりを作り出していく動きが見られた⁷。

こうしたなかで、ケベックのカトリックは次第に教権主義的な性格を脱し、民衆宗教の性格を帯びようになっていった。教会から離れたカトリック教徒にも、文化として残るものがある。ルミューは、ケベックのカトリックは慎ましやかになったが、それでも無視できない文化的実在として、多くの人びとの参照軸であり続けたと述べている。それは人びとの社会的想像力を構造化するもので、通りや学校——公立校を含む——の名称にも聖人たちの名前が用いられ続けた (Lemieux, 1990)。

こうした表象の偏在は宗教的とも世俗的とも評しうる。かくして、文化的な参照枠としてのカトリックは「静かな革命」以降も長いあいだ——少なくとも1世代に相当する30年程度は——残ることになる。近年のケベックにおけるライシテの展開は、本稿で論じてきたような「静かな革命」の時代に起きた宗教および世俗の変化と、その後もしばらく存続した面とに照らして、その度合いが測られるべきものであろう。しかし、それについては稿を改めて論じる必要があるだろう。

(だて きよのお 東京大学)

付記 本稿は科研基盤研究 (A) 20H00003 の成果の一部である。

注

- 1 ここで言う「世俗国家」(L'État laïque) は、実質的にはケベック州政府のことを指す。カナダは「国家」だがケベックは「州」にすぎないという見方とは異なり、ケベックにおける政教関係の叙述には「国家」(L'État) や教会 (L'Église) などの語が用いられる。
- 2 本稿で言う「カトリック」とは、最も広い意味ではケベックの歴史を形作ってきたカトリック的な宗教文化を指す。「カトリック教会」、「カトリック信仰」、「カトリック信徒」など、内容を特定できるものについてはそのように記す。
- 3 代表的な研究に、Dion (1993) がある。
- 4 代表的な研究に、Lamonde (1995) がある。

- 5 ヴァリエールはケベック独立を唱える急先鋒「ケベック解放戦線」(FLQ)の理論的指導者となる。トルドーが提唱した「人格主義革命」は人権憲章の制定に象徴される「上から」のものだが、ヴァリエールの言う「人格主義革命」は人民による暴力も辞さない「下から」のものだった。1970年の「十月危機」の際、ヴァリエールはケベックに軍隊を派遣したトルドーを「ファシスト」呼ばわりした (Laniel, 2018, p.667)。
- 6 ケベックの世俗的ナショナリズムに宗教的なものがあるとして、連邦政府の側にも宗教性はあるのだろうか。一方には、カナダではアメリカの市民宗教のように国民統合を強く推し進めるものはないため、汎カナダ的な市民宗教は不在と指摘する見解がある (Kim, 1993)。他方、カナダにもキリスト教的敬虔を土台とし、二言語多文化主義に行き着く汎カナダ的な市民宗教が存在するとの見解もある (Hofsink, 2014)。
- 7 カリスマ刷新運動とは、伝統的なカトリック教会の外部で生まれた聖霊運動のことを指す。

文献

- ANGERS, Stéphanie et Gérard FABRE (2004) *Échanges intellectuels entre la France et le Québec (1930-2000) : Les réseaux de la revue Esprit avec La Relève, Cité libre, Parti pris et Possibles*, L'Harmattan.
- BAILLARGEON, Stéphane (1994) *Entretiens avec Louis Rousseau : Religion et modernité au Québec*, Liber.
- BAUM, Gregory (1991) *The Church in Quebec*, Novalis.
- COMMISSION D'ÉTUDE SUR LES LAÏCS ET L'ÉGLISE (1971) *L'Église du Québec : un héritage, un projet*, Fides.
- COUTURE, Yves (1994) *La terre promise : L'absolu politique dans le nationalisme québécois*, Liber.
- 伊達聖伸 (2016) 「訳者解説」フェルナン・デュモン『記憶の未来』伊達聖伸訳、白水社、137～183頁。
- DION, Léon (1993) *Québec 1945-2000, vol. 2, Les intellectuels et le temps de Duplessis*, Les Presses de l'Université Laval.
- DUMONT, Fernand (1997) *Raisons communes*, Boréal.
- DUMONT, Fernand (2008) *Pour la conversion de la pensée chrétienne*, dans *Œuvres complètes de Fernand Dumont*, tome IV, Les Presses de l'Université Laval, pp. 1-147.
- GAUVREAU, Michael (2008) *Les origines catholiques de la Révolution tranquille*, Fides.
- GRAND'MAISON, Jacques (1970) *Nationalisme et religion*, Beauchemin, 2 tomes.

- HOFKINS, Clarence Gerald (2014) *From God to Mammon: The Metamorphosis of Civil Religion in Canada*, Thesis for the Degree of Master of Arts in Political Science, University of Northern British Columbia.
- KIM, Andrew E. (1993) « The Absence of Pan-Canadian Civil Religion: Plurality, Duality, and Conflict in Symbols of Canadian Culture », *Sociology of Religion*, vol. 54, n°3, pp. 257-275.
- LAMONDE, Yvan (1991) *Cité libre : Une anthologie*, Stanké.
- LAMONDE, Yvan (1995) *Combats libéraux au tournant du XX^e siècle*, Fides.
- LANIEL, Jean-François (2018) *Il était une foi des bâtisseurs... Vers une synthèse socio-historique du catholicisme et du nationalisme québécois en modernité (1840-2015)*, Thèse présentée à l'UQÀM.
- LEMIEUX, Raymond (1990) « Le catholicisme québécois : une question de culture », *Sociologie et sociétés*, vol. 22, n°2, pp.145-164.
- MEUNIER, E.-Martin et Jean-Philippe WARREN (2002) *Sortir de la « Grande noirceur » : L'horizon « personnaliste » de la Révolution tranquille*, Septentrion.
- ROY, Martin (2013) « Foi chrétienne et souverainisme québécois dans la revue catholique de gauche Maintenant (1962-1974) », *Bulletin d'histoire politique*, vol. 22, n° 1, pp. 155-179.
- シュミット、カール著、田中浩・原田武雄訳（1971）『政治神学』未来社。
- SELJAK, David (2000) « Resisting the 'No Man's Land' of Private Religion: The Catholic Church and Public Politics in Quebec », dans David LYON and Marguerite VAN DIE (dir.) *Rethinking Church, State, and Modernity: Canada between Europe and America*, University of Toronto Press, pp.131-148.